HISTORY OF
TAKUMA MASASHI TSUSHIN
「たくままさし通信」20号の歩み

第1号 >>> 第2号 >>> 第3号 >>> 第4号 >>> 第5号

[たくままさし経歴]

1957年　豊中町岡本に生まれる
1979年　大阪経済大学 経済学部卒業
1989年　大日本印刷(株)退職後、実家の窯業を継ぐ
2000年　桑山小学校PTA会長
2003年　豊中町議会議員当選
　　桑山放課後児童クラブ運営委員会会長
2005年　豊中町議会総務文教常任委員長
2006年　三豊市議会議員当選
　　教育民生常任委員長
2009年　三豊市子ども会育成連絡協議会会長
2011年　総務教育常任委員長
2012年　民生常任委員長
　　NPO法人青空クラブ理事長
2014年　総務教育常任委員長
2015年　三豊市議会副議長
2016年　三豊市社会教育委員会会長
　　三豊市議会永康病院調査特別委員長
　　香川県子ども会育成連絡協議会副会長
2017年　県社会教育委員
2018年　三豊市議会議長

■役職履歴

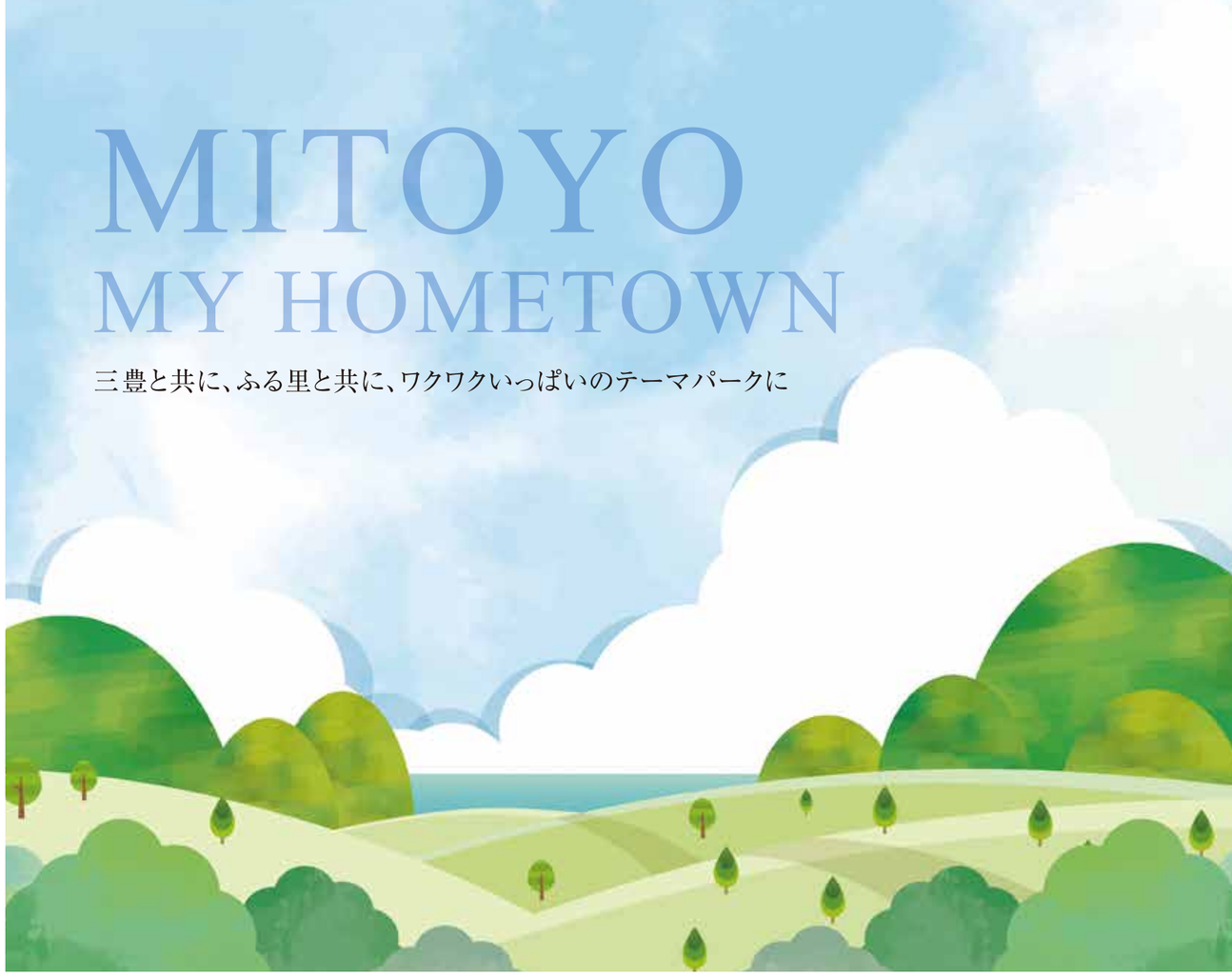
桑山小学校PTA会長
香川県中小企業家同友会理事及び三豊支部長
桑山放課後児童クラブ運営委員会会長
三豊市子ども会育成連絡協議会会長
香川県子ども会育成連絡協議会副会長
NPO法人 青空クラブ理事長
三豊ライオンズクラブ会長
県社会教育委員
三豊スーパーフード生産組合理事
NPO法人 青空キャンバスかがわ 理事

志保の会

【連絡先】
〒769-1507 三豊市豊中町岡本270
TEL.0875-56-6113　FAX.0875-62-5914
E-mail　info@8108.jp
ブログ：たくま まさしの日記帳
【Blog】www.8108.jp

MITOYO
MY HOMETOWN

三豊と共に、ふる里と共に、ワクワクいっぱいのテーマパークに



たくままさし通信[特別号]

三豊市議会議員
詫間政司の「夢」と「想い」

三豊に生きる。

ふる里を想う。

ぶれない
信条と指針

地域の資源を
活かすこと

地場産業の
強化・育成は
まちづくりの根幹

人づくり・まちづくり
は教育から

地方政治の
透明性

幕藩体制が終焉を告げ、それまでの丸亀藩領「三野・豊田郡」が、明治に再分割されて以来、詫間町、三野町、高瀬町、山本町、財田町、仁尾町、豊中町が、2006（平成18）年1月1日に合併し「三豊市」として生まれ変わりました。

瀬戸内海燧灘に面した海浜、讃岐山脈に抱かれた山麓、財田川・高瀬川に沿った肥沃な大地と、それぞれが地産地消の豊かな産業を育て、景観に秀でる観光資源をはぐくみ、古代史から存在を伝える歴史遺産も有する多様性豊かな田園都市を形成しています。

私は豊中町桑山に生を受け今日に至りますが、ここは天平文化の先駆けとして偉大な存在であった空海に縁深い七宝山の麓です。学生・社会人として一旦は郷里を離れ、東京でも働きながら、いつか帰郷をとの思いも強まり、岡本焼＝焙烙器の製造元である実家を継ぎました。それは否が応にも郷里の資源を見つめ、何より将来の有り様を考える起点になりました。

自身の思いと推薦の後押しもあって市会議員となり、はたして自身の歩みが、7つの宝を生み出せているかは不明ですが、今回、小冊子をもってこれまでの歩みを総括しながら、皆様とともにあと少し、宝探しに邁進したいと願っています。

一人の有権者から。

議員は遠い存在?から一気に身近な存在に

思い起こせば30数年前、故郷に戻り家業を後継していく中で、すでに物故されましたが近所の先輩で政治家秘書出身の方からある国会議員（=失職中）の再選支援グループを編成したいと声掛けいただいたことが政治に関わるきっかけでした。約6年、地域の仲間とミニ集会や講演会の開催、ミニコミ誌の発行など、手弁当で自主的に取り組み再選のお手伝いができました。その後もその国会議員との交流とともに、仲間の町長選挙応援などに協力することで地方行政への関心は高まっていきました。

立脚する地域って、これからどうなるんだろう?

家業に馴れてからは地元経済団体の会員としての活動を通じて政治と社会の密接さ、また子育て世代としてどういう教育環境を整えるべきかなどが気になり始めました。この町の子供たちは未来を楽しく語れるのか？少子高齢化の波が押し寄せる中、戸惑う家族を説得しての立候補となりました。挨拶回りから街頭演説、選挙カーでの遊説と、今まで他人事だったことが自身に降りかかる、何とも言えない初めての感覚でした。馴れるものではなく、常に初心、原点に戻ること=有権者の視点だと思っています。

地方議員としてぶつかった壁

「なんとかせないかん!」という熱意だけで立候補し当選したものの、抽象的な思いだけで政策実現は難しく、それでは社会は1つも変わらないという壁に当たりました。地方自治の仕組みすらわからない状況だったのも事実でした。その時、四国学院大学の夏期講座への参加で出会ったのが竹林昌秀氏（現まんのう町議会議員）で、その経験に裏打ちされた「地方自治法」の著者として、当時から様々な講演活動もされていました。出会いから後々までいろいろな局面で指針を得ることとなり、新米議員の私にとって地方自治の恩師となりました。

一般質問に立つということ

議会定例会の一般質問により多く立つことは、議員として有権者への責任です。ただ毎度ながら自身の質問時間が終わるまでは、結構プレッシャーを感じています。原稿内容を精査し、時間内に質疑答弁が速やかに進むよう、あれこれと迷う緊張の中で登壇します。“一回くらい休んでしまえ、楽になるぞ”と悪魔の誘いもあり、しかし“一般質問をするなら勉強もしているよね?“と弱々しい天使の囁きがあります。特に同じテーマで何度も質問する場合は担当部署を詰問する印象になりますが、後日前向きに進めますとの報告があると、”質問、続けるぞ“の心境になります。

”人は受け継ぎ
生き育て伝える“

一人の議員として。

「医療の中核施設：市立永康病院」の建替え、新築事業の推進へ

2017年1月に、第1回永康病院調査特別委員会がスタートし、建設に向けた具体的な実行プランが検討されることに。すでに県の地域医療構想、総務省の新公立病院改革ガイドラインなどの構想を下地に、永康病院側の「永康病院建物更新計画」も受けた調整が続くことになります。少子高齢化、地方での医師不足、診療報酬制度の改定などの諸問題と、今後あるべき三豊市の医療の在り方を関係者は真摯に討議していきました。この調査特別委員会は審査が重ねられ、12月には答申をまとめさせて頂き、本事業の実現へ道筋ができました。構想段階から委員長職を受け大変な作業でしたが、市民熱望の新病院建設に貢献できた慶びは格別でした。

マニフェスト・サイクル

市議会議員選挙におけるマニフェスト「三豊市の次世代ビジョン、第4ステージへ!」の活動を振り返ってみました。

Ⅰ：自学精神の向上に学校図書館の充実と計画を!
Ⅱ：子どもの基本力を高める支援拠点の拡充へ!
Ⅲ：地域医療機関の高度化とネットワークの強化へ!
Ⅳ：市民力で公共施設の新たな価値を創生!
Ⅴ：世界を見据えた語学力の教育体制と雇用の場を!
と宣言しています。
あっという間の4年間、改めて検証とできる限りの継続を目指すこととしています。

仲間とともに“清風会”で研鑽を深める

高木　修

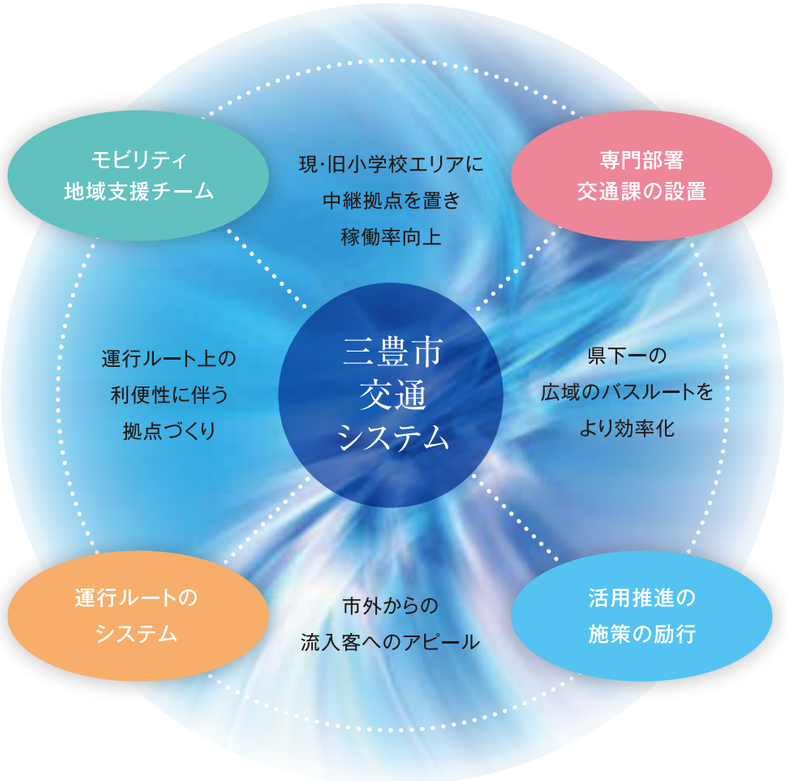
近藤　武

浜口 恭行

三宅　静雄

瀧本　文子

議員としての活動は、地域に役立つ施策を立案し、または承認して実現を目指すことです。多数決が原則であるだけに、良き志や政策理念を共有できる仲間が必要です。それが相互研鑽、視察研修の成果として、三豊市の政策に貢献できるはずです。政治信条を堅持しながらの施策実現には、ともに成し遂げようとする仲間が必要です。現在の市議会では会派清風会5人とともに、三豊市議会の透明・健全な運営、政策議論の場づくりに向き合っています。



三豊市の均衡な発展を願って

行きたいときに 行きたいところへ 行けるまち

「地域公共交通計画」基本理念

“交通の未来”を設計する ～市に“交通政策課”を設置！

医療・買い物困難者の課題解消は、地域の公共交通網の整備にほかなりません。三豊市では従来のコミュニティバスの機能をより高めるための、将来像の“多極分散型のまち”でのモビリティシステムを構築するために、市に専従部署を2021年4月に設置し、大手自動車メーカー等の協力も得て、地域公共交通の未来型システムの整備構想に入りました。基本は7町の現・旧小学校エリアとする“地域コミュニティの再構築”と、中学校区をエリアとする“多極化分散型”の複層で、県下有数の広域バスルート網と合わせ、市内外を均衡にくまなく繋げていきます。

画像提供：市交通政策課

■運行におけるデジタル化も最善策で

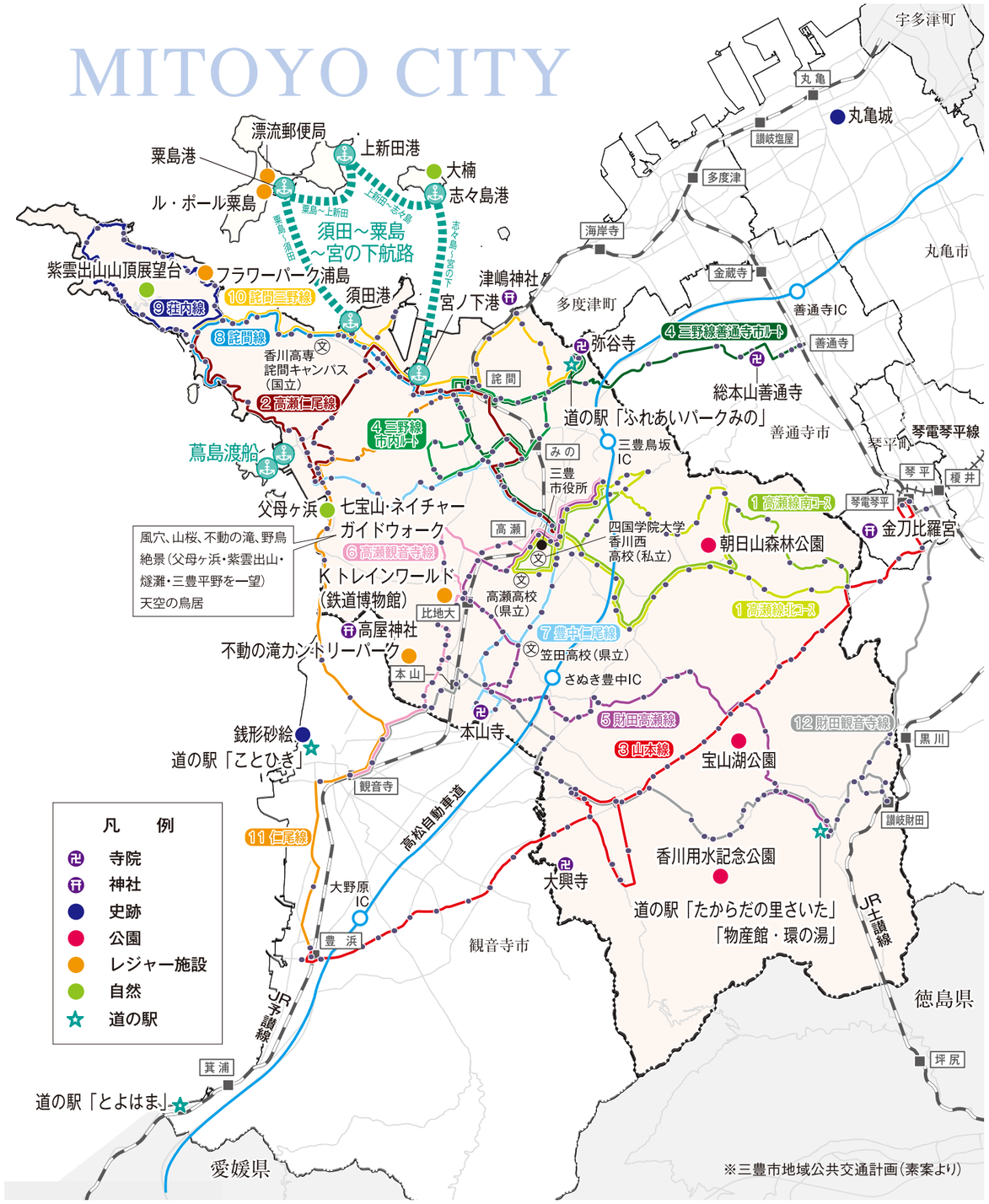
デジタル化で運行時刻の可視化をはじめ、将来に向けてスマートフォンでの定時以外の予約運行活用、GPS活用による利用者の停留所降車後の見守り確認など、様々な利用状況を想定して安心・安全なシステムを目指します。環境に配慮された専用車両も導入しています。7町それぞれの集客ポイントをしっかり繋げて行きます。

■移動の喜びをどの世代にも

医療・買い物・公共施設利用は高齢者向けのイメージでとらえられがちですが、三豊市の充実したコミュニティバスは、都会での公共機関の足が市バス・地下鉄であるように、多くの世代に利用できるモビリティなのです。新しい商業施設を楽しむ、大型イベントの参加など、自転車よりも安全に移動でき、小・中・高生の利用は保護者にも安心、移動も楽しめるはずです。

地方都市の縮図から
「フューチャーモデル＝ワクワクいっぱいのテーマパーク」に。

7町のそれぞれが固有の風土と歴史を有する珠玉のような田園都市は、故郷イメージの原点だと思っています。
全国的に有名な観光スポット、海・山・平野がバランスよく整い、そこには競争力のある産業や地場産品が育っています。
宿泊施設や交通アクセス、ネット環境もよく整備され、市内全域は、生活を思いっきり楽しめるテーマパークです。



※三豊市地域公共交通計画（素案より）

“子育てモデル市”へ

シビック プライド CIVIC PRIDE 三豊市民 でよかった！

“新国富指標”の都市へ

三豊市で取り組み、整えてきた“それぞれの施策”

立候補からの変わらぬ指針「人は受け継ぎ、生き育て、伝える」のすべては子育て問題に帰結します。
平成の合併からも三豊市の少子化は進み、それは子育て条件だけが要因でもなく、
子育て世代の充足感に答えることが、安心のバロメーターです。

みとよKidsスタジオの開設

幼児教育の支援拠点として、幼児期の知育・体育・徳育の基礎力を高め、若いママの育児相談も気軽に応じられる集まりの場を提供しています。

子育て世代包括支援センター「なないろ」の整備

保健師、社会福祉士、学校連携支援員が、妊娠期から子育て期までの、様々な不安や悩みの相談に応じます。また育児情報の提供、関係機関の紹介などをしています。

不妊治療支援制度（一般・特定）

少子化時代、子供を授かりたいという当たり前の希望に、不妊治療支援制度を設け、第一子からステージA～Fの区分で治療費を助成しています。

子ども医療費助成・ひとり親家庭等医療費支給へと充実

0歳～15歳までの医療費補助、一人親家庭の医療費補助（～18歳）などを制度化してきました。まだ不充分な点はありますので、今後もより充実へと訴えていきます。

子ども会活動にSDGsの視点を取り入れた展開

令和2年「自治体SDGs未来都市」に選ばれました。三豊市内の企業やサポート団体に「みとよSDGs推進パートナー」を募り、子どもたちをはじめ市民参加で体験機会を増やしています。市子ども会も参加しています。

放課後児童クラブの市全域展開

帰宅しても家族が不在の児童を対象に、安心安全な居場所の確保と規則正しい生活の習慣を身につける場として、小学校区に設置。

学習支援と支給型奨学金など

児童扶養手当の充足に加え、0歳～15歳までの第一子から二子以上にも児童手当の支給制度が用意されています。また自立に向けての支援プログラムと給付金、進学に伴う高校・専門学校・大学の通学に対して市独自の奨学金制度も用意しています。

子育て環境への条件はさまざま。でも第一歩は人を育む幸せを感じること。

■子育ての本質は…

“三豊市で子育てしたい！”という、
皆さんがごくシンプルに楽しいと想える土壌づくり

SDGs時代&ESG社会へ、地域の数値化できない資産に“光を当てる施策”

持続可能な社会システムの実現へ17の目標が定められ、着眼次第では新事業も期待されます。
またESG投資といわれるように地方企業にとっても、適合すれば投資対象のチャンスとなります。
それを礎とした豊かな自然と観光資源に、新たな魅力を見い出した「豊かさ実感都市」へ。

産官学連携の強化

高専のロボコン大会活躍が牽引したことで大学ラボ（マイズムによるAI研究）の誘致、モビリティタウン構想による自動車メーカーとの共同研など、常に先駆ける取り組みをしています。

地場産業の広報支援も積極的

FM香川「週刊みとよ　ほんまもんRadio」で市内の特色ある企業紹介をはじめ、地場で働く自営業や生産者、移住後に起業された方の人物像にも迫ります。

コミュニティバスの利用

市全域をカバーするコミュニティバスのネットワークを駆使して、移動の自由を実現していきます。

三豊市はSDGs宣言都市だ

SDGsパートナー企業や団体と連携した、未来社会への挑戦。地元を代表する企業をはじめ、地域で活動する各NPO法人、金融機関各支店、高校関係、大手企業の香川県・三豊拠点（支店・工場・現地法人）など48社が参画。

※SDGsとは／「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。2015年9月に開催された国連サミットにおいて決められた「国際世界共通の目標」です。
※ESGとは／Environment（環境）・Social（社会）・Governance（ガバナンス）の頭文字。ESG投資では、この3つの角度から企業を分析した上で投資を行います。

すでにここにあるのに気付いていない資源、ネットワークをさらに融合し、つなげていきたい。

■市民にとって「本当に住んでいて良かった」と実感するまちとは…

他のまねではない**“ここにあるものに新たな価値を”**自らが見つけようとすること

みとよ探求部
一番ワクワクすることを見つける！

ふるさと納税返礼品のPR動画を作成する
探求ワークショップの様子

みとよ探求部とは、ワクワクしながら探求して学びたい中学生・高校生が集まる有志のクラブ活動です。三豊市教育委員会や東京の大学の専門講師が支援します。学びの進め方についてアドバイスしたり、生徒のテーマと関連する地元企業・社会人・市役所職員などを紹介します。参加生徒には、地域の課題解決や魅力発信について、一人ひとり違うテーマで活動してもらいます。テーマを決めるところから講師が支援します。

みとよ探求部の特徴

●自分がワクワクするテーマをもとに学びすすめる

与えられたテーマではなく、自分が一番ワクワクするテーマを見つけて、それを探求していきます。

●地元みとよを題材に探求

三豊を新しい視点で見つめ直すことや、まちを盛り上げている大人との交流を通じて地元を題材にした探究活動を行います。

●学校を超えた仲間

市内の様々な学校からの参加者や、探究活動をサポートしてくれる東京の大学生と仲間になり、ワクワクすることを語り合えます。

みとよ探求部で学べること

●探求する力

これからの時代に不可欠な、自ら考え、意見を持ち、行動しながら学んでいく力を養うことができます。

●コミュニケーション力

グループワークや他学年・大人たちとの交流を通じて、自分の意見を発信したり、一緒に何かを作り上げたりする力をつけることができます。

●問題発見・問題解決力

探求を行う中で問いを見つけ、それをどう解決できるかを考える機会を提供します。その中で独自の意見や思考をもとに、問題解決力を育みます。

“教育の未来”を整備する
市内の人的資源の発掘へ

三豊市ならずとも地域の未来を支える事業に“教育分野”を優先という重要性には言を持ちません。少子化が地域に学ぶ若者の選択肢を狭めることになってはいけませんし、高齢化だからこそ地域で生きる知恵を伝える機会を広げたいと思っています。

■今ある教育資源をフル活用することから始めたい

1949（昭和24）年に開校した国立詫間電波高専は、優秀な人材を多く輩出し近年は高専ロボコンで全国優勝も成し遂げています。2009（平成21）年の統合により香川高専詫間キャンパスになりましたが、この背景を踏まえてAI研究のトップランナー：東京大学の松尾研究室との共同研究拠点を財田町に開設。ベンチャー精神のある人材を育成します。

■今あることからの積み重ねで

子育て支援における優先条件は学校の環境整備の魅力に加え、知育・教養の視点ならそれは図書館機能の充実です。子どもたちの研究心、尽きない興味に応えられるのは、蔵書以上に図書館司書の資質、検索システム、移動図書館などで、学校教育を補完できる整備支援に取り組んでいます。

第5ステージへの想い
まちづくりは行動だ！

三豊市の行政課題、地域再生課題に精一杯取り組んできた自負心はあります。指針である“人は受け継ぎ、生き育て、伝える”をさらに実効性のあるものにと、地域資源を生かした地域課題の解決＝農業をキーワードに集大成とするため取り組んでいます。

休耕田・耕作放棄地で「モリンガ」の栽培から加工～販売の事業化へ

令和3年度の主要施策に「薬用作物をはじめ特色ある農作物の栽培推進」が掲げられ、私は仲間とスーパーフードといわれる“モリンガ”の栽培に着手。また付加価値化のために、加工場を設置、さらに販売ルートの確保や商品化・ブランディングへと進めています。香川大学農学部と大倉工業R&Dセンターの協力のもと、地域の若手農業者と力を合わせ、作付面積を拡大することで農地保全をするとともに、荒廃農地を削減します。

三豊スーパーフード生産組合
http://www.mitoyomoringa.com/

“みとよのみ”からハラシモベースの
「ヴィーガンキャラメル」が県産品コンクールで受賞

MITOYO MORINGA
三豊産モリンガ茶【ほうろく焙煎】
（30パック入）

ブランド化×ネットワーク化で三豊から全国へ

“みとよのみ”は、三豊市の一次産業の生産者に呼び掛けて、地場産品を魅力ある商品化によって振興しようとするプロジェクトです。三豊スーパーフード生産組合として“みとよのみ”に参画しました。2021年現在、モリンガを原料としたお茶等を生産販売しています。これからの取り組みとして、三豊市のふるさと納税の返礼品として、市の財源確保に貢献していきたいと考えています。

みとよのみ https://www.mitoyonomi.jp